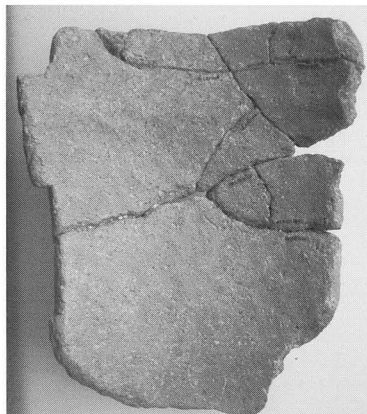
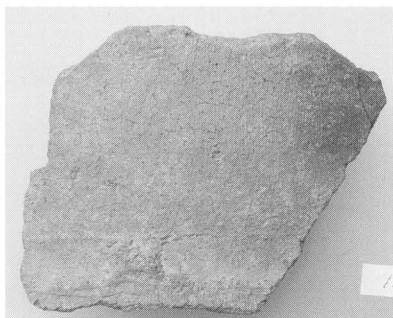




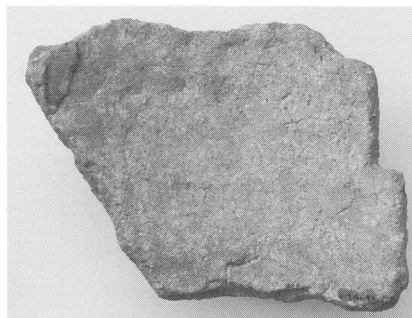
図版96 円筒埴輪中位(第29図-4)表



図版97 円筒埴輪中位(第29図-4)裏



図版98 円筒埴輪中位表



図版99 円筒埴輪中位裏



図版100 円筒埴輪基底部(第33図-1)表



図版101 円筒埴輪基底部(第33図-1)裏



図版102 円筒埴輪基底部(第33図-4)表



図版103 円筒埴輪基底部(第33図-4)裏

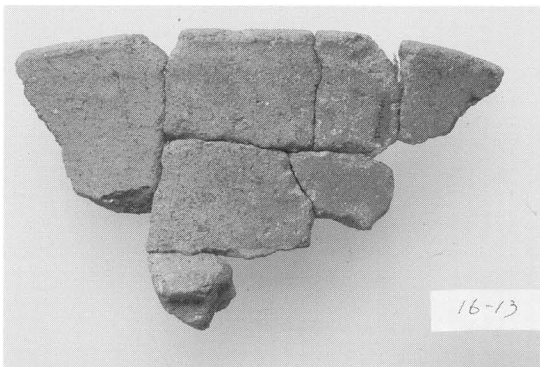
写真15 15トレンチ出土埴輪3



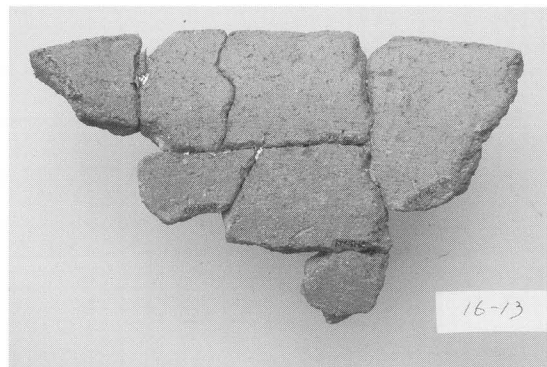
図版104 円筒埴輪口縁部(第28図-1)表



図版105 円筒埴輪口縁部(第28図-1)裏



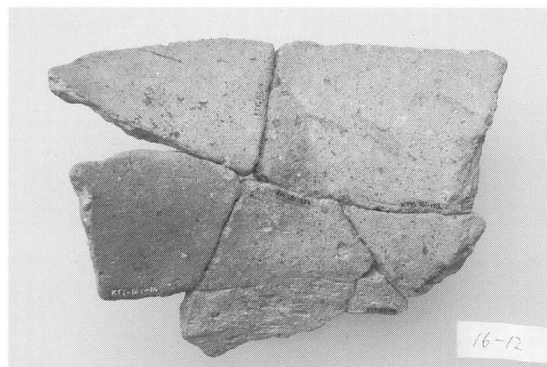
図版106 円筒埴輪口縁部(第28図-3)表



図版107 円筒埴輪口縁部(第28図-3)裏



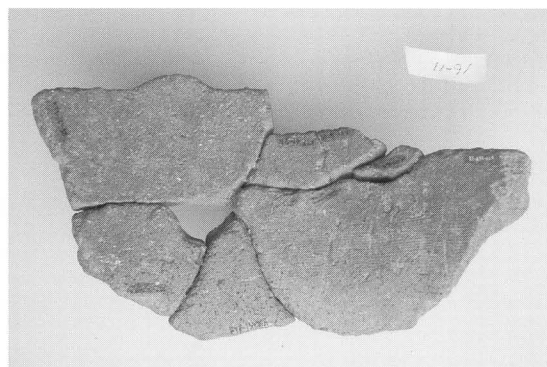
図版108 円筒埴輪口縁部(第28図-4)表



図版109 円筒埴輪口縁部(第28図-4)裏



図版110 円筒埴輪口縁部(第28図-6)表

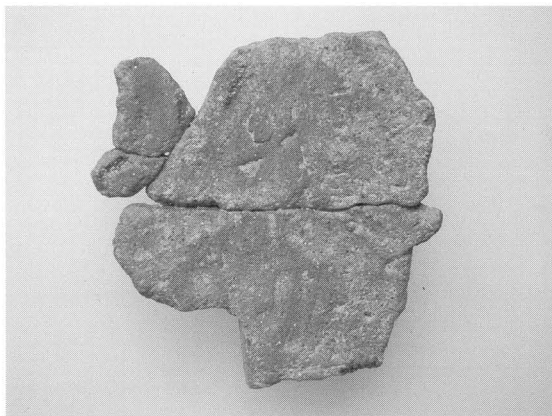


図版111 円筒埴輪口縁部(第28図-6)裏

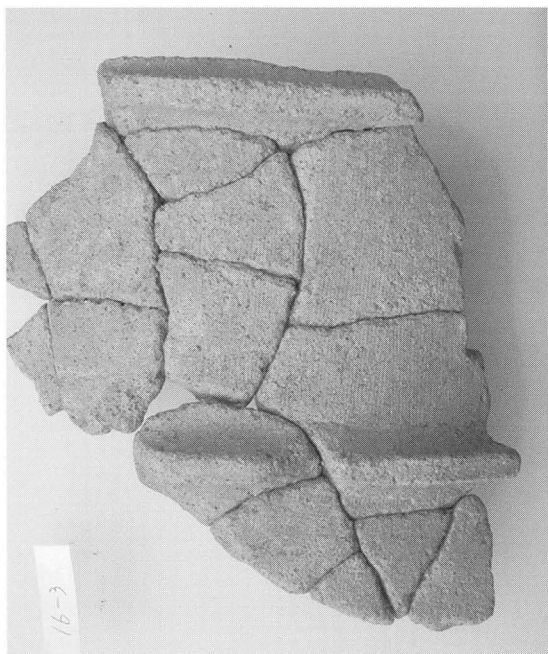
写真16 16トレンチ出土埴輪1



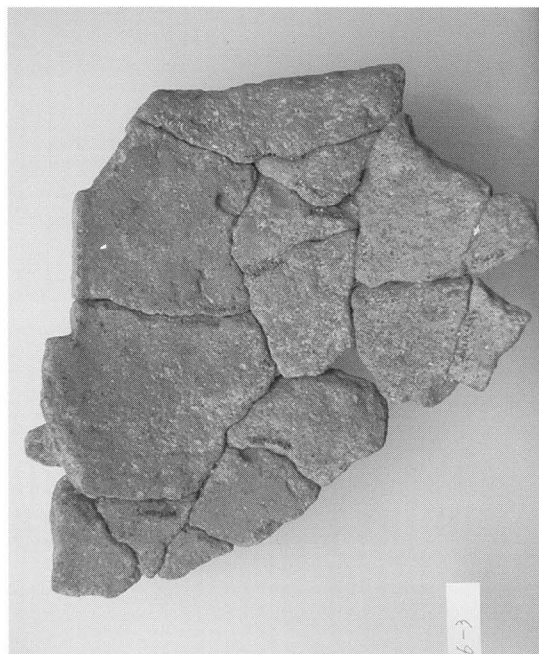
図版112 円筒埴輪中位(第29図-3)表



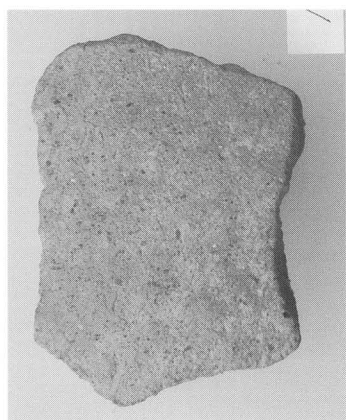
図版113 円筒埴輪中位(第29図-3)裏



図版114 円筒埴輪中位(第30図-4)表



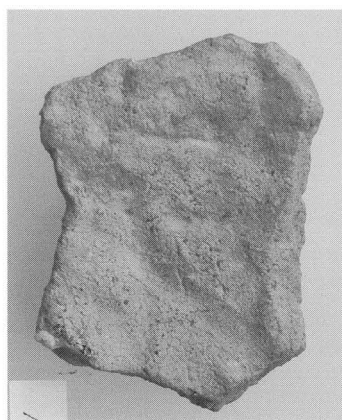
図版115 円筒埴輪中位(第30図-4)裏



図版116
壺形埴輪底部：
穿孔部(第27図-5)表

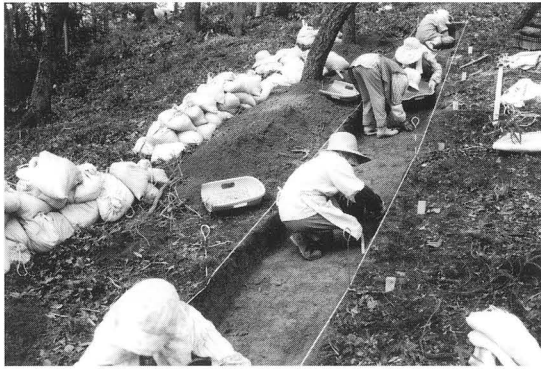


図版117
壺形埴輪底部：
穿孔部(第27図-5)断面



図版118
壺形埴輪底部：
穿孔部(第27図-5)裏

写真17 16トレンチ出土埴輪2



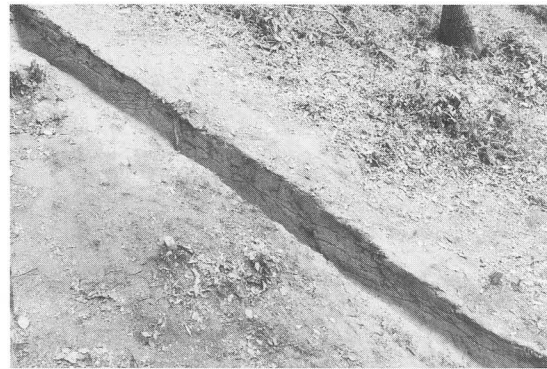
図版 1 1 9 作業風景



図版 1 2 0 置土検出状況（北西から）



図版 1 2 1 置土検出状況（西から）



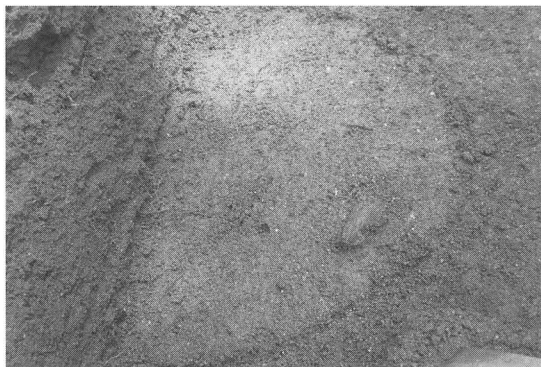
図版 1 2 2 盛土確認状況（西から）



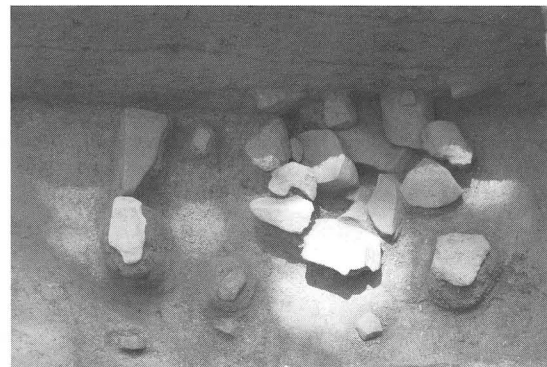
図版 1 2 3 盛土確認状況（北西から）



図版 1 2 4 盛土検出状況（西から）



図版 1 2 5 埴輪据付墳？検出状況（南西から）



図版 1 2 6 土壌検出状況（北西から）

写真 1 8 1 8 トレンチ



図版127 墳端付近から墳頂を望む（南東から）



図版128 トレンチ全景（北東から）



図版129 トレンチ全景（東から）



図版130 推定テラス付近確認状況（南から）



図版131 埴輪据付墳？検出状況（南から）

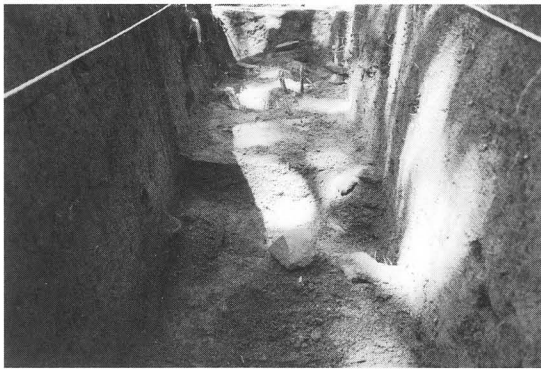


図版132 埴輪据付墳？間掘状況（南から）



図版133 埴輪据付墳？検出状況（南西から）

写真19 19トレンチ



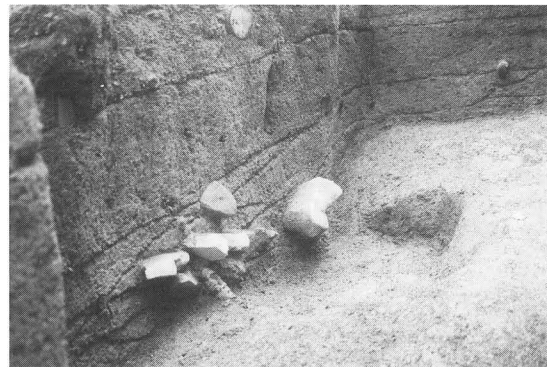
図版134 出土遺物検出状況（北東から）



図版135 礫等堆積状況（北東から）



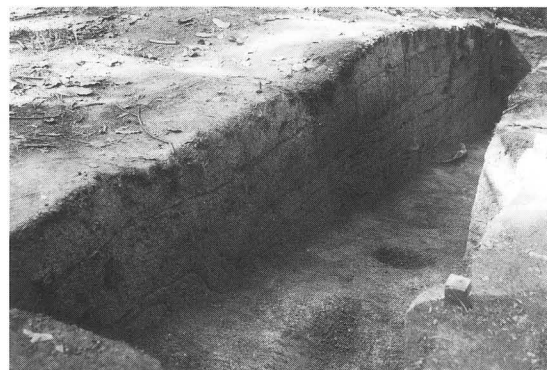
図版136 土壌検出状況（南東から）



図版137 土壌堆積状況（南から）



図版138 南東壁土層堆積状況（西から）



図版139 南東壁土層堆積状況（北から）

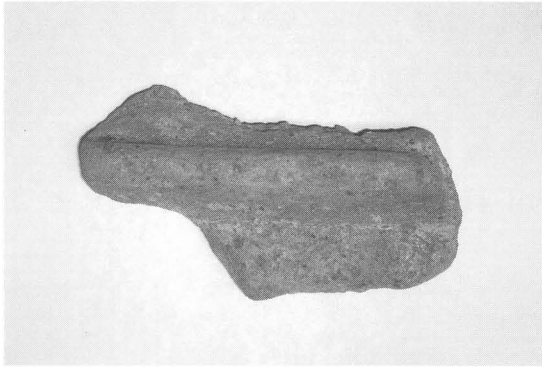


図版140 北西壁土層堆積状況（東から）



図版141 北西壁土層堆積状況（南から）

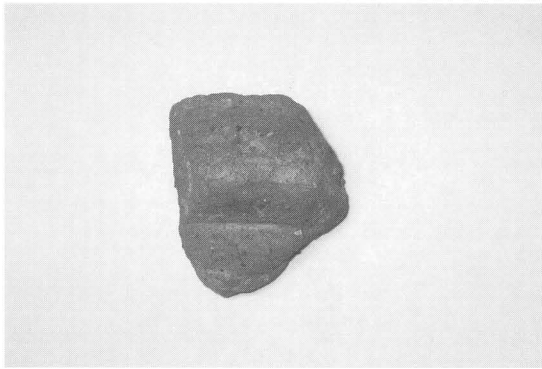
写真20 20トレンチ



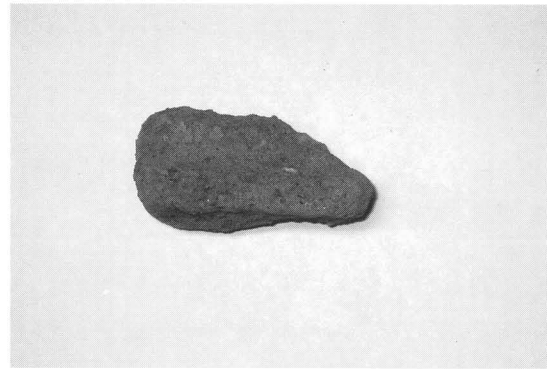
図版142 18トレンチ円筒埴輪中位 (第42図-1)



図版143 18トレンチ円筒埴輪口縁部 (第42図-2)



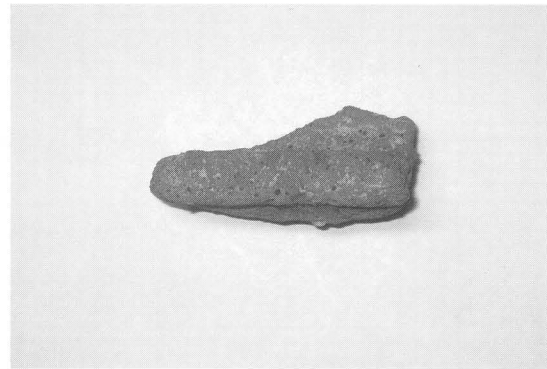
図版144 18トレンチ円筒埴輪中位 (第42図-3)



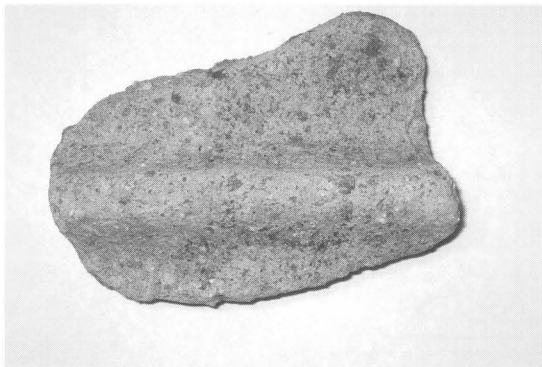
図版145 18トレンチ円筒埴輪中位 (第42図-4)



図版146 18トレンチ壺形埴輪口縁部 (第42図-5)



図版147 19トレンチ円筒埴輪中位 (第42図-6)



図版148 20トレンチ円筒埴輪中位 (第42図-7)

写真21 各トレンチ出土埴輪

第7章 快天山古墳の構築

第1節 立地

1. 地形との関係

快天山古墳は、綾歌町富熊の北東端で坂出市府中と境をなす横山山麓から南に派生した丘陵の南端に位置し、尾根先端で絞り込まれた丘陵が再び広がった部分に立地する。

なお、この部分は尾根主軸がほぼ南北方向となっており、墳丘主軸がこれに合致している。墳丘は、尾根下方に後円部、尾根上方に前方部を設定して構築されている。

2. 可視領域

周辺の地形環境を考慮してみる。快天山古墳後円部中心点からの可視領域を考えてみると、真北に対して西側は、41.5度（富熊竜王山）～180度（真南）間の138.5度の範囲で可視領域が広がる。逆に東側は、77～180度（真南）間の103度の範囲となり若干狭まる。この範囲では、快天山古墳から半径1.5km以内については死界もなく全域を見渡すことができる。

また、町域を越える可視範囲を見ると、真北に対して西側では53度（飯野山）～180度（真南）間の127度の範囲、東側は一部堤山によって視界が遮られる部分もあるが、77度（住吉神社）～180度（真南）の範囲に視界が広がる。特に、西側の53度（飯野山）から74度（法軍寺）および東側の77度（住吉神社）から107度（堤山）間の30度の範囲については障害もなく視界が良好である。

快天山古墳被葬者の基盤となる地域を考えると土器川右岸の岡田・法軍寺周辺もしくは綾川流域の白石・有岡地域であることが想定される。

これらの内でも西側の方が全般的な可視領域が広く展開することから西側を正面としている可能性が強い。

3. 旧地形観察

次に、快天山古墳築造当時の地形を推測してみると、東南東から綾川が流れ込んでおり、堤山の北側（渡池地区）から快天山古墳の南側眼下を抜け、その先は岡田台地の東から北側に回り込み丸亀平野を潤していたものと思われる。特に、快天山古墳以北と堤山以南についてはいずれも丘陵が連続しており丸亀平野と羽床盆地との交通の要所であったことは容易に推測できる。

ここで、旧地形の中で周辺の遺跡との関係を見てみると、快天山古墳の南西部から北西部にかけて佐古川遺跡、佐古川・窪田遺跡、行末遺跡、行末西遺跡というように弥生時代前期ごろからこの地域が拠点集落として利用されていたことが判ってきている。また、これらの集落で生活をしてきた人たちによって平尾墳墓群、石塚山4号墳、佐古川・窪田遺跡の周溝墓群というような造墓活動が活発に行われるようになってきている。

古墳時代に入っても石塚山1号墳や横山経塚1・2号墳、奥川内1号墳というような讃岐独特の築造様式、いわゆる『讃岐型前方後円墳』と称されるものが築造されており、この築造様式は快天山古墳以降、陣の丸古墳群にも引き継がれている。

第2節 墳丘形状

これまでに実施されてきた調査成果によると、推定される前方部前端付近で区画溝と考えられる落ち込みが確認され、後円部後端付近で顕著な地山傾斜変換点を確認されている。また、後円部西側および東側墳端付近でも墳端を想定させるような地形が確認されている。更に、東側くびれ部では墳端および段築に伴う施設が確認された。その展開を見ると、くびれ部の屈曲点と捉えることができる曲がり角が確認されている。また、西側でも同様に屈曲点を確認されている。西側では、くびれ部付近の前方部側で確認されている葺石やテラスが北寄りの斜面でも確認されており、地形を考慮するとその区間は直線状に連続するものと捉えることができる。

また、これらの区域で設定してきた調査トレンチの堆積層からは、それぞれ埴輪片や葺石に使用されたと考えられる礫が多く出土している。

これらの内容を考慮し、総合的に考えると快天山古墳の形状は前方後円形で前方部は三段築成、後円部は三段築成もしくはそれ以上の段築を有することが読み取れる。

第3節 墳丘の大きさ

第4～6章で、墳丘確認調査で実施されてきた各トレンチ調査の成果を記載している。その調査内容から、現在の快天山古墳の大きさを測ると、次のとおりとなる。

- 墳丘全長・・・・・・・・・・98.8m：4トレンチ傾斜変換点～1トレンチ区画溝下場
- 後円部東西径・・・・・・・・63.5m：後円部中心点～3トレンチ傾斜変換点を半径とする
- 後円部南北径・・・・・・・・68.0m：後円部中心点～4トレンチ傾斜変換点を半径とする
- 前方部長・・・・・・・・・・35.6m：11・13トレンチ墳端屈曲点～1トレンチ区画溝下場
- 前方部幅（くびれ部）・・32.5m：前方部墳丘主軸～11・13トレンチ墳端屈曲点を半径とする
- 前方部幅（前端部）・・30m以上：14トレンチで確認した外表施設と2トレンチで確認した外表施設から考慮して（前端隅が撥型を呈するかどうかは不明）
- 墳丘高さ（後円部）・・10.55m：頂部と5トレンチ傾斜変換点との比高差
- 墳丘高さ（前方部）・・4.35m：前方部中央部と14トレンチ墳端との比高差
- 後円部頂と前方部頂の比高差・・2.04m

これらの内容を当地域の前期前方後円墳と比較すると、墳丘全長が30～40mでなく突出して大規模であることや、段築構造になってはいるものの前方部が太くて短いことが

特徴としてあげられる。

第4節 構築

1. 立地関係

北方から南方へ延びる丘陵の先端に位置する快天山古墳は、北方に前方部を向けて立地する。即ち、北から南へ緩やかに下る傾斜地上に築造されている。

快天山古墳をこのような地形上に配置するために採用された構築方法は、前方部を地山削り出し、後円部については上半部を盛土によって形成するというものであった。

2. 前方部

これまでの調査で設定してきた前方部でのトレンチ調査によると、盛土を確認することはできていない。葺石の裏込めやテラス面に置かれている整形土（置土）はわずかに見られるが、墳丘を構築するためのものとは明らかに性質を異にする。また、その地山面を利用して後述する外表施設が備えられていることから考察しても、前方部については丘陵を削り出して形状を整えていることが明確である。

3. 後円部

後円部では畑地への変更を受けているため、ほとんどの部分で墳丘表面を確認することができていない。3トレンチで墳端と思える傾斜変換点の確認や18・19トレンチで埴輪据付壇らしきものの確認、また18トレンチで置土を確認している程度で、構築方法について断言できる資料は見出せない。しかしながら、前方部の状況や後円部で確認した数少ない資料から考慮するとやはり地山削り出しと考えるのが適当である。

しかし、後円部の上半部については新たな構築方法が採用されていることが判った。平野部に張り出した丘陵先端に立地する快天山古墳の質感溢れる後円部は盛土によって築き上げられているのである。前述したとおり表面部については変更を受けているため旧状を知ることはできないが、この三年の調査によって後円部北側（17トレンチ）で71.1m、後円部西側面（3トレンチ）で70.0m、後円部南西側面（18トレンチ）で69.64m以上が少なくとも盛土で形成されていることが確認できた。また、この地域の巨大古墳の盛土については調査事例もほとんど無く詳細はつかめないが、快天山古墳に取り入れられているものは、数種類の土質のものを組合せながら水平に敷き詰めていくというもので、灰を練り混ぜたもの等を利用して非常に堅緻なものとなっている。この点から築造当時に優れた土木技術者が採用されていたことがうかがえる。また、11・12トレンチで確認したくびれ部2段目テラス面と15トレンチで確認したくびれ部2段目テラス面を比較すると位置・高さ共に極めて高度な測量技術を備えていたことをうかがうことができる。

第5節 外表施設

快天山古墳は、本地域で築造された前期前方後円墳では最大規模であり、また本格的な段築構造を取り入れられた初期段階の古墳である。その外表施設としては、葺石、テラス面、円筒埴輪列があげられる。

1. 葺石

葺石はくびれ部付近の調査および前方部西側面の調査で確認されている。各段の斜面部に葺かれており、各段とも基底石に長軸で35～45cm程度の石材が使用され、その上部はそれより小型の石材が使用されている。また、石材は部位によって安山岩の板石や花崗岩の円礫が使用されており様々である。これは築造時の作業単位によって相違が見られるものと考えられるが、その詳細については現在のところ不明である。

後円部やその他の箇所では明瞭な葺石の状況が確認できなかったが、石材が多く散乱または地表下に包含されていることから、本来は全体に施されていたものと考えられる。

2. テラス面

各段にテラス面が設けられており、部位によっては整形で置土が施されていたようである。テラス面の幅は確認できている範囲では1.3～1.8mと概ね1.5m前後で統一されているようである。

テラス面は墳丘の前方部の側面および後円部には備えられているようであるが、比高を考慮すると前方部前面にまでは配されていない可能性が強い。

3. 円筒埴輪列

埴輪の設置については、東側くびれ部付近の調査で樹立した状況が確認されているが、その内容によると1、2段目テラス面のほぼ中央に3～4m間隔で円筒埴輪が連続する。また前方部西側側面での調査でも樹立した円筒埴輪が確認されている。更に、樹立した状況は確認されていないが後円部南半部でも埴輪据付壇の可能性をもつ遺構が確認されている。また、調査してきたそれぞれのトレンチの堆積土に埴輪片が多く包含されていることから墳丘全面に配列されていたことが推測できる。

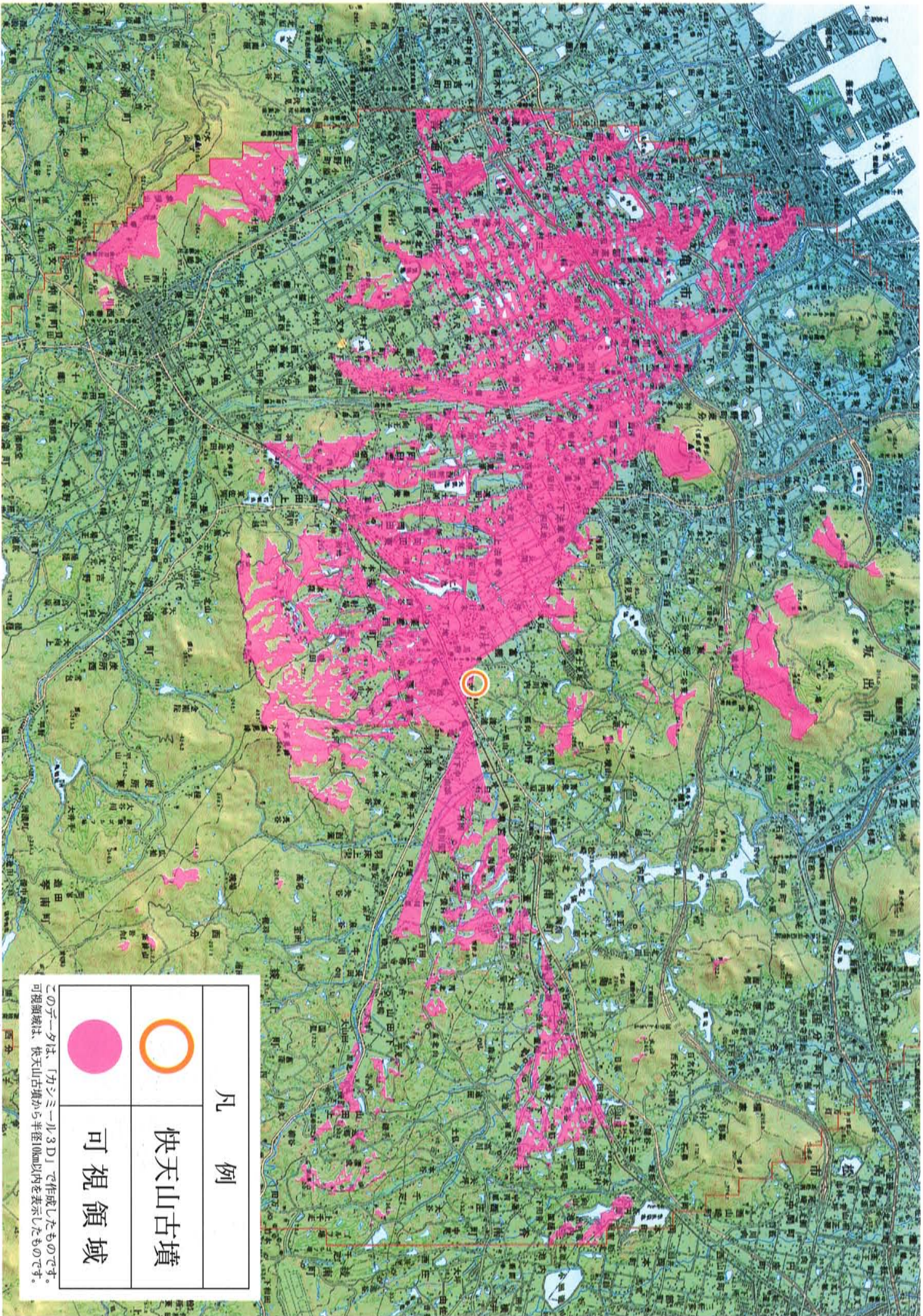
尚、前方部三段目の斜面部にも円筒埴輪片の堆積が見られることから墳頂にも同様に配列があったものと考えられる。

墳丘からの出土遺物は、そのほとんどが円筒埴輪であるが、少量の壺形埴輪も出土している。また、過去の調査では鳥形の土製品も確認されている。

第6節 埋葬施設

埋葬施設は3基あり、1・2号は竪穴式石槨、3号は粘土槨である。棺は、3基とも刳拔式割竹形石棺で頭位を北に向けて配置されている。1951（昭和26）年に発掘調査が実施されており、それらの形態からわが国で最も古い石工集団により製作されたものであることが明らかになった。

出土遺物は、獣文縁方格規矩四神鏡等銅鏡4点、管玉5点、勾玉1点、石釧2点等の装身具の他、鉄製の武器や農耕具が多数確認されている。また、2・3号石棺からは人骨も出土している。



第 4 3 図 快天山古墳からの可視領域 (S=1/100000)

第8章 まとめ

快天山古墳は、昭和25年に地元の有志による調査が、昭和26年に京都大学の梅原末治・横山浩一により発掘調査が実施されている。発掘調査は主体部を中心に実施したものであった。墳丘測量と踏査の結果から、墳丘形態は前方後円墳で、規模は全長100m、後円部径65m、後円部の比高9mを測ることが確認され、外表施設としては部分的に葺石・埴輪列を確認している。また、主体部については第1～3号石棺が確認され、主体部は墳丘上に3基配列されていることが確認されている。

出土遺物は、獣文縁方格規矩四神鏡・内行花文鏡・珠文鏡などとともに管玉・勾玉などの装身具、鉄剣・鉄矛・鉄刀・鉄鏃などの武器類、鉄鑿・鉄斧・鉄鍬・鉄鎌などの農耕具が第1主体（第1号石棺）を中心に出土している。

上記調査以降、半世紀程快天山古墳に調査の手が加えられることは無かったが、諸般の事情及び契機によって新たに確認調査を実施することになった。

今回の調査は、墳丘形態・規模・外表施設の確認のために平成13～15年度までの3ヵ年で計画的に調査区を設けて実施してきた。

その結果、前方部3段、後円部3段以上の段築を確認し、それぞれに円筒埴輪・壺型埴輪を配し、全面に葺石が葺かれていることを確認した。

また、後円部の上半部はこの地域では確認されていない版築状の盛土で構築されていることも併せて確認できた。

これまでの調査成果と併せて、視野を広げて快天山古墳をみると県内において重要な位置を占める古墳であることがわかった。

快天山古墳の築造時期は、これまで石棺型式と副葬品組成から古墳時代前期中葉後半（前方後円墳集成編年3期）に比定されてきた。これまでに継続的に実施してきた確認調査では主に、出土埴輪の型式および編年から従来の所見との対比を試みてきた。

本地域の古墳時代前期円筒埴輪の様相は必ずしも詳らかではなく、この点の厳密な検証は今後の課題とせざるを得ないが、少なくとも調査で得た資料を検討した結果では、石棺・副葬品組成から推測された時期観と矛盾する点はない。

上記の事項から、現段階の判断としては従来の所見にしたがって本古墳の築造時期を前方後円墳集成編年3期と推測しておきたい。

香川県内には約80基の前方後円墳が所在し、その内約8割の62基が古墳時代前期に属している。これら前期古墳を中心として、その首長墓系譜をみると丸亀平野西部（善通寺市）、丸亀平野東部（坂出市・綾歌町ほか）、高松平野北西部（石清尾山）、高松平野東部、雨滝山周辺（さぬき市）を中心とした5つの地域的なまとまりが想定できる。

快天山古墳はこれらの5つの地域のうち丸亀平野東部の地域に属するもので、この地域には坂出市・飯山町に所在する城山古墳群、坂出市・綾歌町・綾南町の境界付近の横山山麓に所在する古墳群を中心として約10基の前方後円墳が分布している。

快天山古墳が所在する横山山塊には最高所に2基の積石墓の前方後円墳を含む横山経塚古墳群が所在し、やや尾根を下った部分に陣の丸古墳群、丘陵先端部に快天山古墳が所在する。

これらの古墳の築造時期は、積石墓である横山経塚1・2号墳が集成編年1・2期に、盛土墳である陣の丸1号墳が集成2期に比定されている。これらの古墳は集成編年3期に比定される快天山古墳の前段階に築造されてきた古墳である。

このことから考察すると、横山山塊に所在する古墳に横山経塚1号墳→横山経塚2号墳・陣の丸1号墳→快天山古墳となる首長墓系譜が認められ、前段階にあった積石墓の系譜が消滅し、盛土墳となり、快天山古墳に集約される状況が認められる。

県内に所在する前期前方後円墳の築造方法・構造的な特徴をまとめると次のとおりとなる。

- ①墳丘は丘陵尾根先端を選び、築造され、丘陵主軸と墳丘主軸が平行し、前方部を上方、後円部を下方に配置すること。
- ②墳丘は土盛りばかりでなく、積み石で築造されているものがあること。
- ③前方部が細くて長く、撥形を呈すること。
- ④埋葬施設は後円部の中心部に竪穴式石槨・刳拔式木棺が築かれ、二基の埋葬施設を平行して配置すること。
- ⑤埋葬主軸は墳丘主軸に斜行して設けられ、方位は東西方向となること。

以上の5つとなる。

これらの特徴は弥生時代後期後半の墳墓に部分的に認められ、高松平野北西部（石清尾山）に所在する石清尾山古墳群の中の鶴尾神社4号墳の成立で定型化する。

以上の特徴と快天山古墳を比較してみると、立地・墳丘方向・竪穴式石槨は通有のものであるが、埋葬主軸が南北方向であることや墳丘の段築・葺石・埴輪は県内の前方後円墳の特徴ではなく、畿内の築造方法を採用していることがわかる。

この快天山古墳の成立はこの地域の首長墓系譜の中で見ると在地的な古墳築造要素の中に新たに畿内の要素が取り入れられる時期で、集成編年3期がひとつの画期となっていることがわかる。

この集成編年3期の画期をほかの地域で見ると雨滝山周辺地域の中の赤山古墳が、快天山古墳と同様に畿内の要素を取り入れた古墳である。

さらに、快天山古墳の際立った特色は、3基の主体部に刳拔式の石棺を採用していることである。刳拔式石棺は、畿内中枢部の大型前方後円墳から出土していないことから、畿内との直接的な関与がなく、国内で快天山古墳に始めて採用されたものである。

香川県内には、刳拔式石棺の石材として綾歌郡国分寺町に所在する鷺の山産の石材（角閃安山岩）とさぬき市に所在する火山産の石材（凝灰岩）がある。そのうち快天山古墳の石棺に採用されているものは鷺の山産の石材である。

鷺の山産の石材は快天山古墳以降、石船塚古墳（高松市）・三谷石船古墳（高松市）などの県内の首長墓や、県外では安福寺石棺（大阪府柏原市）・松岳山古墳（大阪府柏原市）の石棺にも採用されている。

一方、火山産の石材は快天山古墳とほぼ同時期のさぬき市に所在する赤山古墳に採用さ

れ、赤山古墳以降、岩崎山4号古墳（さぬき市）・けぼ山古墳（さぬき市）などの県内の首長墓や県外では鶴山丸山古墳（岡山県備前市）、大代古墳（徳島県鳴門市）などの石棺にも採用されている。

これらのことから、快天山古墳に端を発する刳抜式石棺を採用する埋葬形態が他地域の埋葬形態に取り入れられていることが明確となり、中央の政治体系に影響を与えられる基盤がこの地域で確立されていたことが伺える。

以上のように、丸亀平野東部の地域における集成編年3期の画期を代表する古墳である快天山古墳は、本県のみならず四国・瀬戸内地域の古墳文化や、奈良盆地を中心とした畿内政権との関係を考える上で極めて重要な古墳と評価できる。

報告書抄録

ふりがな	かいてんやまこふん はくつちょうさ ほうこくしょ							
書名	快天山古墳発掘調査報告書							
副書名								
巻次	2004.3	シリーズ名		シリーズ番号				
編集者名	綾歌町教育委員会 主任主事 近藤 武司							
編集機関	綾歌町教育委員会							
所在地	〒761-2492 香川県綾歌郡綾歌町栗熊西 1638 番地 TEL0877-86-5963							
発行年月日	2004年3月31日							
頁数	例言・目次等	本文	挿図	表	図版	総頁		
	14頁	100頁	43枚	1枚	150枚	114頁		
ふりがな	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
かいてんやまこふん 快天山古墳	綾歌町 栗熊東字若狭 807-1 915 916-1 917 920-2 920-4 920-5 富熊字畑田 2151	37384	00003	34度 13分 57秒	133度 53分 30秒	2001.4.2 ～ 2003.8.31	281.4 m ²	遺跡分布調査 遺構確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
かいてんやまこふん 快天山古墳	古墳	古墳時代前期		墳丘 割竹形石棺 葺石 テラス 円筒埴輪列		円筒埴輪片 壺形埴輪片 須恵器片 石斧片 八稜鏡 瓦器片		段築 地山削出・盛土併用

快天山古墳発掘調査報告書

平成16年3月31日

編集・発行 綾歌町教育委員会

〒761-2492 香川県綾歌郡綾歌町栗熊西1638番地

電話(0877)86-5963

印刷 四国工業写真(株)